様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：４２２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１００２

研究課題名（和文）縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on information transmission and material distribution system in the Jomon period

研究代表者
大工原　豊（DAIKUHARA, YUTAKA）

國學院大學栃木短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：２０６４１２０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：縄文社会では遺構の形態差、土器・石器型式の差による文化圏が存在する。その境界は自然障壁と人為的障壁があるが、情報・物資がすべて双方向的に通過するものではなく、その一部が阻害される場合がある。また逆に複数の文化圏を貫いて遠隔地まで流通する場合もある。草創期・早期の遺物分布は、集団の広域遊動の結果である。前期前半には土器型式圏を超えて物資の互酬連鎖交換が始まる。そして前期後葉には交易による物資流通システムが成立する。さらに中期以降には製作・流通の専業化が進み、多くの物資が広域に流通するネットワークが構築される。しかし各種情報は必ずしもこれとは連動せず別の情報伝達システムにより伝播されるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの縄文時代の研究では、同じ型式の遺物の分布が存在した場合、ヒトの動き、モノの動き、情報の動きのいずれなのか検証せず、漠然と捉えて流通論が論じられてきた。その結果、なぜ同一型式・形態の遺物が広域に分布するのかについて、正確に理解しようとする意識が希薄であったと言える。非常に長い時間スケールをもつ縄文時代では、一見すると同じように見える遺物の分布も、時期によって異なる人間活動の結果に帰因するものであることについて、具体的研究事例を蓄積することにより、広く問題提起することができたと考える。本研究が嚆矢となることで、日本の基層文化である縄文文化の流通に関する研究を活性化に寄与することができる。

研究成果の概要（英文）：In Jomon society, there is a cultural sphere due to differences in the morphology of remains and the types of earthenware and stone tools. There are natural and artificial barriers to the boundary, but not all information and goods pass in both directions, and some of them may be hindered. Conversely, it may be distributed through multiple cultural areas to remote areas. The distribution of artifacts in the earliest period is the result of the wide-area movement of the population. In the first period, the reciprocal exchange of goods beyond the earthenware type sphere begins. But, in the latter half of the first period, a system of goods distribution through trade was established. Furthermore, from the middle period, specialization of production and distribution progressed, and a network was built in which many goods were distributed over a wide area. However, various types of information are not necessarily linked to this, but are propagated by another information transmission system.

研究分野：考古学

キーワード：広域遊動　互酬連鎖交換　交易　情報伝達　物資流通システム　文化圏　専業集団　型式圏

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

縄文時代においては、多くの文化圏が存在し、その境界には情報伝達や物資流通を阻害する自然障壁と人為的障壁がある。そこでは全ての情報や物資が双方向的に通過するものではなく、一部の情報・物資のみ阻害されるケースもしばしば認められる。また、全く阻害されることなく複数の文化圏を貫いて遠隔地まで及ぶものも存在する。

特に、物資の流通では単なる連鎖交換ではなく、専業の交易集団が介在するケースも存在する。そこで本研究では文化圏の境界や接触地帯に焦点をあて、情報伝達や物資流通がどのように行われているのか時空的動態を把握し、流通システムの類型化（モデルの構築）を行い、その発展過程を解明する必要があると考えた。

２．研究の目的

縄文社会においては、多くの文化圏が存在することが遺構の形態差、土器型式・石器型式の差異から読み取ることができる。こうした文化圏の境界は自然障壁によるものと、人為的障壁によるものがある。そして、情報・物資がすべて双方向的に通過するものではなく、一部の情報や物資の通過が阻害されるケースがしばしば認められる。また、阻害されることなく複数の文化圏を貫いて遠隔地まで流通する情報・物資も存在している。特に物資の流通では単なる連鎖的交換ではなく、半専業・専業の交易集団が介在したケースも存在する。

そこで本研究では文化圏の境界や接触地帯に焦点をあて、遺構、儀礼・祭祀、土器、石器、石材などの情報伝達と物資流通がどのように行われているか、時空的動態を把握し、さらに地理情報システムを用いて統合的な解析を行う。そして流通システムの類型化（モデルの構築）を行い、どのように発展していったのか解明することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、これまで文化圏の境界や流通障壁の存在が部分的に明らかな関東・甲信地域の６つのエリアを対象とし、縄文時代においてどのような文化圏の境界や流通障壁が存在しているのか、通時代的に明らかにする。対象とするエリアは群馬県を中心とする関東・甲信越地方であり、ここは山脈・山地・河川・低地帯などさまざまな自然障壁が存在しており、また、土器型式圏などの文化境界も多数存在しており、モデルケースとしては最適な地域である。また、各エリアの通過難易度は異なっている。文化境界・接触地帯での遺構・土器・石器の在り方を検討した。本研究では当初、①遺構検討グループ・②土器検討グループ・③石器検討グループ、④石材検討グループに分かれてグループ研究を実施する予定であった。しかし、コロナ禍のため集団での活動は困難になったので、研究者が専門分野について個別に研究し、最終的に研究代表者が各々の成果を取りまとめて総括する方法に変更した。

本研究は４カ年計画の予定で実施した。２ヶ年目には中間検討会を開催し、問題点を洗い出すとともに、新たに追加する必要のある研究を決定した。また、４カ年目には研究成果の発表会を実施し、それを基に研究成果の総括を行うことにした。なお、研究成果については、適宜論文・学会で発表を行った。そして、活動状況及び研究成果は、成果報告書として印刷製本し、研究機関等に配布することにした。電子版は今後ホームページ等で公開する予定となっている。

研究対象資料・地域は多岐にわたっており、各時期の研究テーマは、概略以下のとおりである。

草創期では、本の木型石槍と爪形文土器に伴う石器群に着目し、広域遊動するエリアと、障壁について検討した。

早期では、前葉の撚糸文土器群、中葉の沈線文土器群の分布域と動態及び、早期特有の剥片剥離技法（城山技法）や三角錐形石器の分布域等を検討した。

前期では、既研究において群馬・山梨地域の後葉から末葉の黒曜石交易の様相を解明しているので、本研究では前葉から中葉にかけての黒曜石の流通について検討した。また、後半期の土器型式圏を越えて移動する異系統土器群の在り方についても検討を行った。

中期では、群馬・長野県境に分布する郷土式土器の在り方、中部地方を中心とする釣手土器の外縁部の在り方について検討した。また、新潟地域を中心とする火焔土器の情報伝播と、硬玉大珠の流通の関連性についても検討を行った。また、房総地域の大形石鏃（東長山野型）の出現と、神津島産黒曜石の流通ルートや、西関東の大形粗製石匙（神谷原型）の周辺地域への伝播について検討した。さらに、関東東部を中心に分布する初源的有茎鏃（桧の木型）の周辺地域への流通・伝播についても検討を行った。

後期では、関東西部から甲信地方の弧状列石を伴う「核家屋」の様相と、配石墓（石棺墓）の分布域と動態についての検討を行った。また、後・晩期の群馬地域の器種セットの在り方や、関東・甲信地方の土製耳飾りの地域性と動態について検討した。そして、晩期中葉～末葉のいわゆる飛行機鏃の分布と型式変化についても検討を行った。

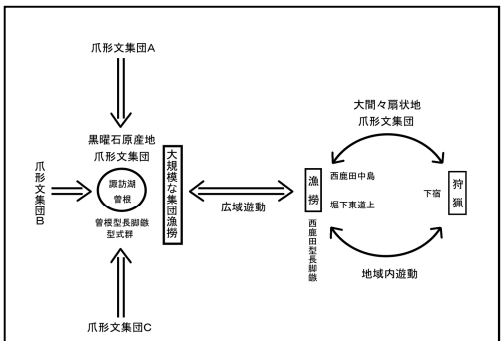
さらに、実際の縄文人の移動ルートを解明するため、山岳地帯で出土する縄文土器・石器の在り方についての研究を追加することにした。

４．研究成果

（１）草創期：広域遊動する狩猟集団

草創期前半期では、「本の木型」石槍についての研究を行った（担当：小菅将夫）。この石槍は新潟県本の木遺跡を要として関東平野に扇形に分布する。これは同一集団による反復的な回帰遊動（ヒトの移動）によるものと推定される。移動ルートに当たる群馬地域には中継製作遺跡が存在しており、石槍を仕上げる作業が行われている。そして、房総地域では分水嶺に沿って、狩猟のベースキャンプ（リダクション・分割再製作）が存在し、その周囲に狩場（石槍１点出土遺跡）が面的に広がっていたことが確認された。つまり、この段階は「埋込戦略（embedded strategy）」（Binford 1979）のモデルが合致する行動型であり、三国山脈は移動の障壁になっていない。

また、爪形文段階の石器群の研究も行った（担当：大工原豊）。大間々扇状地では、在地の黒色頁岩・チャート製の西鹿田型長脚鏃を保有する遺跡と、黒色安山岩等の側湾三角鏃を保有する遺跡が異なる立地環境に存在しており、漁撈キャンプ（長脚鏃）と狩猟キャンプ（側湾三角鏃）の間を季節的に移動する地域内遊動が行われていた（第１図）。しかし、特定の季節には諏訪湖曽根遺跡まで広域遊動していたと推定される。曽根遺跡には黒曜石製長脚鏃を保有する原産地集団（ホスト集団）と、非黒曜石製長脚鏃を保有する遠隔地の集団（ゲスト集団）が集合し、大規模な漁撈活動が行われていたと考えられる。こうした離合集散により、漁撈技術などの情報が伝達されていた可能性が高い。なお、黒曜石原産地に集合しているにも関わらず、黒曜石はほとんど持ち帰っておらず、情報伝達と物資流通が連動しないケースもあったことが判明した。



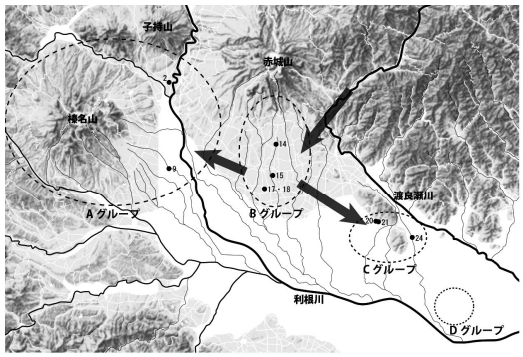
第１図　爪形文集団の地域内遊動と広域遊動

（２）早期：広域遊動する集団

早期では、前葉の東関東の撚糸文土器（天矢場式）の動態を扱った研究（担当：中村信博）、前葉の城山技法について扱った研究（担当：大工原）、中葉の群馬地域の沈線文系土器群の研究（担当：文挟健太郎）を実施した。

撚糸文終末期の関東地方には、天矢場式（茨城・栃木）・花輪台Ⅱ式（千葉）・東山式（埼玉・東京）・大浦山式（神奈川）の土器型式集団がゆるやかな領域をもって並存していたことが判明した。

また、撚糸文段階に便宜的に利器を製作する当期特有の城山技法は、西関東内陸部に偏在していることが判明した。しかし、東京湾岸や東関東には稀薄であり、貝刃が使用されていたと推定される。この技法の分布は広域遊動による集団の行動範囲を反映したものであるが、撚糸文土器群の分布とは必ずしも一致しない。



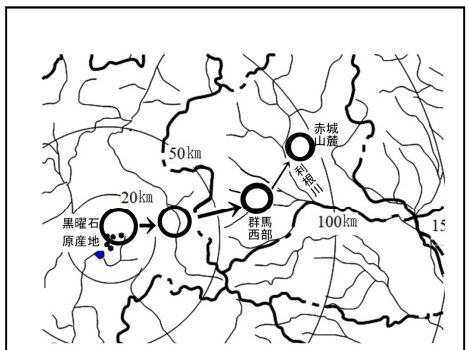
第２図　早期中葉の土器群の動態（Ⅱ期）

早期中葉は遺跡が稀薄になる時期であるが、群馬地域は周辺地域から多種多様の土器の集団がさまざまな方向から次々に流入する「入会地」的場所であったことが判明した（第２図）。

このように、当期においては内陸部では定住性が非常に低く、広範囲を広域遊動する生活が常態であり、集団の活動領域の境界も厳密に定まっていなかったことが分かる。

（３）前期前葉～中葉：モノの連鎖交換

この時期では群馬地域での長野県産黒曜石の流通についての研究を行った（担当：大工原）。黒曜石製石鏃の保有率は利根川を挟んで極端に減少することが判明した。この現象は集団間の互酬連鎖的交換（Down-The-line model　Renfrew 1975）によるものと考えられ、群馬西部は供給ゾーン、赤城山麓は接触ゾーンに相当すると考えられる（第３図）。このケースでは、県境の上信山地帯は流通の障壁になっておらず、供給ゾーンは土器型式圏を超えている。一方、同じ土器型式圏であっても赤城山麓は接触ゾーンであり、土器型式圏＝流通圏にはなっていないことが判明した。



第３図　黒曜石の連鎖交換による流通

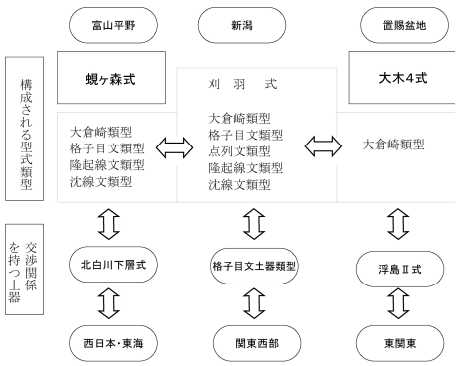
（４）前期後葉～末葉：交易による物資流通と型式間交渉

当期では黒曜石は交易集団が介在する交易により、200 ㎞圏までの流通が可能になったことが、既研究により解明されている（大工原　2002・2007等）。また、威信財として天神原石匙や超大形原石が遠隔地まで交易により流通していることも確認している。これに本研究の成果を加え、韓国考古学会で研究発表を行った（第４図：大工原　2019）。

また、当期の米沢盆地で製作された押出型石匙・石槍の流通の既研究では、型式情報を共有する押出型及び亜型式の型式圏と、その外側の流通圏との間に「型式情報の壁」が存在していることや、外側に模造型式群が存在することを明らかにしている（大工原　2003）。このケースでは「情報の秘匿」が威信財の流通に大きな影響を与えていたことが分かる。

今回の研究では、この時期の日本海側と太平洋側を対象に土器型式圏の間での型式間交渉の在り方を明らかにした（担当：関根慎二）。具体的には、日本海側の格子目文類型などと、太平洋側の獣面把手・塗彩浅鉢などの移動(搬入)に着目して分析を行った。その結果、両者とも少量ではあるが、急峻な三国山脈を越えて移動しており、双方向的な型式間交渉（土器の移動と型式情報の伝播）、すなわちヒトの行き来があったことを明らかにした（第５図）。

第４図　前期後葉～末葉の黒曜石交易網



第５図　前期後葉の土器型式圏の型式間交渉

（５）中期：複雑化する情報伝播と交易

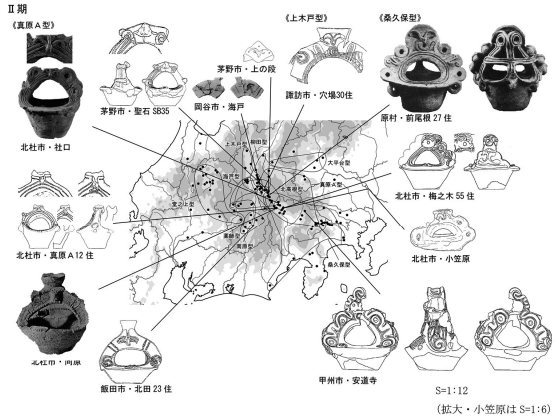
中期後葉の顔面付釣手土器の研究では、関東甲信・北陸地域の顔面付の郷土型と多量出土の桜町型を取り上げ、複雑に情報が錯綜する当期の展開について検討した（担当：中村耕作　第６図）。特に、本研究では外縁部に当たる北信・北陸地域の様相を中心に、その動態を明らかにした。ここでは単にモノの情報伝播ではなく、背景にはハイパーな儀礼行為の情報の伝播が想定される。

また、房総地域の大形石鏃（東長山野型）の研究（担当：大工原）では、阿玉台式期では奥東京湾をターミナルとして黒曜石の供給が行われていたのに対し、加曽利Ｅ式前半期では外房や奥鬼怒湾岸にターミナルが形成され、そこから東長山野型石鏃とともに房総地域へ流通していたことを解明した。

そして、火炎土器の情報伝播と硬玉大珠の流通に関する研究（担当：長田友也・建石　徹）では、会津ルートでの火炎土器の情報伝達は大木８ａ式であるのに対し、硬玉大珠の流通は大木８ｂ式期以降であり、両者に時間差があることを解明した。これは情報伝達と物資流通が別個の現象であり、従来の想定を覆す画期的な成果となった。

また、大形粗製石匙を型式学的に検討し、多摩地域を中心に分布する範型の明確な神谷原型と、その周辺地域に分布する神谷原系が存在することを明らかにした(担当：小松崎百恵)。ドメスティックな石匙の型式を分析し、流通によらない石器型式情報の伝播の実態を明らかにした。

さらに、中期後葉～後期初頭の初源的有茎鏃（桧の木型）は、那珂川流域の狭い範囲に集中しており、周辺地域への流通は限定的であったことを解明した（担当：芹澤清八）。

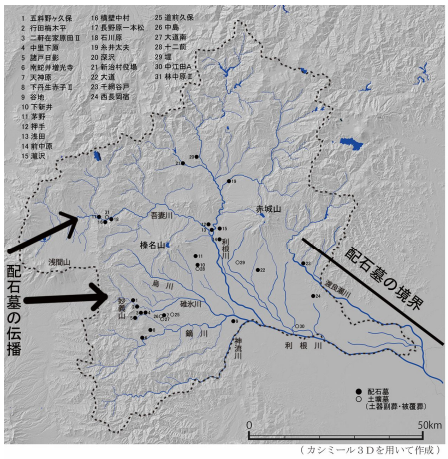


第６図　顔面付釣手土器の地域的展開

（６）後期：遺構情報の伝播と文化圏の形成

後期前葉～中葉の弧状列石を有する「核家屋」は西関東から甲信地方に偏在していることが、既研究により確認されている（石坂　2017 等）。本研究ではこの地域の遺跡の集落構造を詳細に検討し、流通システムの複雑化・専業集団の出現の背景にある階層化社会の実態を明らかにした（担当：石坂　茂）。

また、同じ地域では後期前葉（堀之内２式期）に東北北部から配石墓（石棺墓）が伝播し、受容されていることについては既研究で確認されている（第７図：大工原　2017 等）。本研究では、当期の階層化社会の実態を墓制の面から分析し、群馬地域における配石墓の形態（型式）変遷と、階層構造について明らかにした（担当：大工原）。両研究により、同じ土器型式圏であっても、核家屋、配石墓ともに渡良瀬川が分布境界になっていることを解明した。

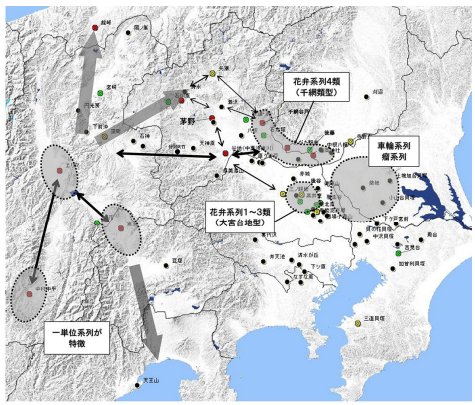


第７図　群馬地域の配石墓の分布と境界

（７）後期後葉～晩期前葉：土製耳飾にみる複雑な地域性

関東甲信越地域の後期後葉～晩期中葉の土製耳飾を文様構成から系列に細分し、遺跡ごとの系列組成の違いを比較することにより、甲信地域と関東地域の系統の違いと、遺跡ごとに組成が異なる複雑な社会構造を明らかにした(担当:角田祥子)。これは、女性の通婚圏や耳飾の情報伝播、製品としての流通などが複雑に投影された結果と推定される。

また、後期後葉に大宮台地で出現した花弁系列の影響を受けて、晩期中葉には渡良瀬川流域に大形花弁系列を製作する専業集団が出現し、「渡良瀬縄文文化圏」を形成するようになる動態についても明らかにした（第８図）。



第８図　土製耳飾の地域性と動態

（８）晩期中葉～末葉：複雑な土器型式の展開と飛行機鏃の拡散

当期の関東内陸部の土器型式の複雑な動態について、土器組成から明らかにした（担当：林　克彦）。また、晩期中葉～末葉の飛行機鏃については、盛行する甲信地域での分布状態と変遷を明らかにした。そして、下布田型が内陸部で変容して御社宮司型が成立し、さらに変容して無茎化した深町型が出現するまでを型式学的方法により分析し、その終焉が晩期末葉～弥生時代前期にあったことを明らかにした（担当：村松佳幸・宮坂　清・大工原）。

（９）特論：山上での縄文人の活動軌跡

本研究では山上に残された縄文遺物を集成し、そこでの縄文人の活動の軌跡や、移動ルート、祭祀行為などについての考察を加えた（担当：櫛原功一）。

＜引用文献＞

① 石坂　茂、「核家屋」集落の構造、縄文時代、第 28 号、2017、1-26
② 大工原　豊、関東地方北部における配石墓（石棺墓）の出現と展開、考古学ジャーナル、№702、2017、12－16
③ 大工原　豊、黒曜石の流通をめぐる社会、縄文社会論（上）、2002、67-131
④ 大工原　豊、模倣と模造、縄文時代、第 14 号、2003、1-29
⑤ 大工原　豊、黒曜石交易システム、縄文時代の考古学、第６巻、2007、164-177
⑥ 大工原　豊、黒曜石交易ネットワークの出現と縄文社会の動態、第 43 回韓国考古学全国会交流と交通の考古学、2019、29-40
⑦ Binford,L.R, Organization and formation processes: Looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research,* 35, 1979,255-273.
⑧ Renfrew,C, Trade as Action at a Distance : Questions of Integration and Communication (Sabloff.J.A. and C.C.Lamberg-Karlovsky eds.). *Ancient Civilization and Trade,* 1975,1-59.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 前原　豊・大工原　豊・加部二生	４．巻 43
２．論文標題 群馬県東道上遺跡採集の爪形文土器と石器群	５．発行年 2021年
３．雑誌名 利根川	６．最初と最後の頁 21-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大工原　豊	４．巻 25
２．論文標題 房総地域の縄文時代中期の大形石鏃－東長山野型石鏃の展開とその意義－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 下総考古学	６．最初と最後の頁 221-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大工原　豊	４．巻 12
２．論文標題 茅野遺跡の後・晩期の石器について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史跡　茅野遺跡　（二）遺物編	６．最初と最後の頁 212-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大工原　豊	４．巻 12
２．論文標題 縄文時代晩期の遺跡テリトリーと居住人口について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史跡　茅野遺跡　（二）遺物編	６．最初と最後の頁 227-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 建石　徹・三浦麻衣子・大工原　豊・二宮修治	4．巻 12
2．論文標題 茅野遺跡・下新井遺跡出土黒曜石資料の産地分析	5．発行年 2021年
3．雑誌名 史跡　茅野遺跡　（二）遺物編	6．最初と最後の頁 230-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大工原　豊	4．巻 229
2．論文標題 関東地方における縄文時代早期前葉の剥片剥離技術	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国史学	6．最初と最後の頁 59-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大工原　豊	4．巻 44
2．論文標題 群馬地域における配石墓（石棺墓）の形態と変遷	5．発行年 2022年
3．雑誌名 利根川	6．最初と最後の頁 57-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大工原　豊	4．巻 なし
2．論文標題 群馬地域における縄文時代前期前葉～中葉の黒曜石の流通	5．発行年 2022年
3．雑誌名 モノ・構造・社会の考古学－今福利恵博士追悼論文集－	6．最初と最後の頁 245-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村信博	4．巻 43
2．論文標題 船橋市取掛西貝塚における第Ⅲ期・Ⅳ期土器群の検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 栃木県考古学会誌	6．最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大工原　豊	4．巻 なし
2．論文標題 いわゆる飛行機鏃の終焉－御社宮司型と深町型－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 326-337
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小菅将夫	4．巻 なし
2．論文標題 中継製作遺跡と「本の木型」石槍	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 文挟健太郎	4．巻 なし
2．論文標題 群馬県南東部における縄文時代早期中～後葉期の異系統土器の流入と動態	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 73-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関根慎二	4．巻 なし
2．論文標題 山に生かされる土器－縄文前期後半期の文化圏を往来する土器－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 106-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中浩江	4．巻 なし
2．論文標題 郷戸式土器の様相	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 112-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村耕作	4．巻 なし
2．論文標題 外縁部にみる釣手土器の地域的展開	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 126-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長田友也・建石　徹	4．巻 なし
2．論文標題 火焔土器と硬玉製大珠の様相	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 156-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小松崎百恵	4．巻 なし
2．論文標題 大形粗製石匙の研究－縄文中期の神谷原型について－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 191-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芹澤清八	4．巻 なし
2．論文標題 桧の木型石鏃の展開	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 203-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石坂　茂	4．巻 なし
2．論文標題 中部・関東地方における縄文時代後期の「核家屋」の様相	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 215-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林　克彦	4．巻 なし
2．論文標題 土器の器種セットと個体－群馬県域の縄文時代後・晩期土器群の様相－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 269-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 角田祥子	4．巻 なし
2．論文標題 土製耳飾りの様相	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 276-301
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村松佳幸	4．巻 なし
2．論文標題 山梨地域の飛行機鏃	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 302-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮坂　清	4．巻 なし
2．論文標題 長野地域の飛行機鏃	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 310-325
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 櫛原功一	4．巻 なし
2．論文標題 山岳地帯発見の縄文土器、石器	5．発行年 2023年
3．雑誌名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	6．最初と最後の頁 349-361
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 大工原　豊
2．発表標題 いわゆる飛行機鏃の終焉 －御社宮司型と深町型－
3．学会等名 明治大学黒耀石研究センター2021年度研究集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 大工原　豊
2．発表標題 房総地域の縄文時代中期の大形石鏃
3．学会等名 明治大学黒耀石研究センター研究集会2020
4．発表年 2020年

1．発表者名 大工原　豊
2．発表標題 黒曜石交易ネットワークの出現と縄文社会の動態
3．学会等名 第43回韓国考古学全国大会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 大工原　豊
2．発表標題 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究
3．学会等名 明治大学黒耀石研究センター2022年度研究集会
4．発表年 2023年

１．発表者名 大工原　豊
２．発表標題 黒曜石からみる縄文早期人の行動領域
３．学会等名 第四紀学会公開シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 大工原豊・長田友也・建石徹　編著	４．発行年 2020年
２．出版社 ニューサイエンス社	５．総ページ数 516
３．書名 縄文石器提要	

１．著者名 大工原　豊、小菅将夫、前原豊、加部二生、中村信博、文挟健太郎、関根慎二、田中浩江、中村耕作、長田友也、建石　徹、小松崎百恵、芹澤清八、石坂　茂、林　克彦、角田祥子、村松佳幸、宮坂　清、三浦麻衣子、二宮修治、櫛原功一	４．発行年 2023年
２．出版社 大工原　豊	５．総ページ数 365
３．書名 縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	石坂　茂 (ISHIZAKA Shigeru)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	長田　友也 (OSADA Tomonari)		
研究協力者	櫛原　功一 (KUSHIHARA Kouichi)		
研究協力者	小菅　将夫 (KOSUGE Masao)		
研究協力者	小松崎　百恵 (KOMATSUZAKI Momoe)		
研究協力者	関根　慎二 (SEKINE Shinji)		
研究協力者	芹澤　清八 (SERIZAWA Seihachi)		
研究協力者	建石　徹 (TATEISHI Touru)		
研究協力者	田中　浩江 (TANAKA Hiroko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	角田　祥子 (TSUNODA Shouko)		
研究協力者	中村　耕作 (NAKAMURA Kousaku)		
研究協力者	中村　信博 (NAKAMURA Nobuhiro)		
研究協力者	林　克彦 (HAYASHI Katsuhuko)		
研究協力者	宮坂　清 (MIYASAKA Kiyoshi)		
研究協力者	村松　佳幸 (MURAMATSU Yoshiyuki)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関